

附属と連携した授業力向上の取り組み：教科指導力高度化演習

保健体育・日野克博

1. 授業の概要

本授業（教科指導力高度化演習）は，大学院教育学研究科教科教育専攻の必修科目になっている。この授業では，「教育現場等のフィールドを積極的に活用して，高度な実践的指導力を獲得する」ことが目的の一つに挙げられている。教科ごとに設定された「実践的指導力養成プログラム」の自主的・体験的学習を通して実践的指導力の育成が期待されている。本授業の到達目標は次のとおりである。

1. 授業実践を多面的視点から分析・考察する
知見や能力を習得する
2. 教科に関する研究的な実践能力を習得している
3. 観察や研究の成果を科学的方法によって整理し，それらを効果的に表現することができる
この目標の達成にむけ，保健体育領域で取り組んだ「実践的指導力養成プログラム：特別支援学校の体育授業を創造する」について報告する。

2. 授業の展開

平成30年度を受講生は大学院生5名であった。本授業は，附属特別支援学校の体育授業を大学院生が構想・実践・評価等を行うものである。授業は，ADDIEモデルにそって展開した。ADDIEモデルとは，目標を達成するために必要な学習活動を分析・設計・開発・実施・評価の5つのフェーズとして定義したものである。以下，5つのフェーズにそって授業の概要を説明する。

1) 分析 (Analysis)

特別支援学校の体育授業を構想・実践するにあたり，特別支援教育や障がい者理解等の基礎知識を身に付けるために，前期の期間，以下の活動に取り組ませた。

①文献調査

学習指導要領等の書籍や先行研究を調べ，特別

支援学校の体育授業に関する基礎知識や先行研究，障がい者スポーツの推進に関する施策等を整理させた。

②障がい者スポーツの直接体験

＜「愛アスリートクラブ」の練習への参加＞

障がい者のスポーツクラブである「愛アスリートクラブ」の練習会に参加し，直接，障がい者のスポーツ活動を体感させた。

＜障がい者スポーツ大会のボランティア体験＞

愛媛県障がい者スポーツ大会にボランティアとして参加し，障がい者のサポートを直接体験させた。

＜M 高等技術専門学校での体育授業の補助＞

職業能力開発施設で軽度の障がいのある生徒への体育学習に補助として参加させた。

③附属特別支援学校での「朝の運動」の参与観察

授業を担当する生徒の特徴や障がいの程度等を理解させるために，附属特別支援学校の体育的活動（朝の運動）に参加させた。

これらの学習を通して，受講生は，特別支援学校における体育授業の位置づけ，障がい者支援の留意点，障がい者理解の重要性，特別支援教育のねらい等について理解を深め，その内容を前期の全体報告会で発表した。

2) 設計 (Design)

前期の分析をもとに，後期は具体的な授業づくりに取り組ませた。授業のねらいを，「する・みる・ささえる」に焦点をあてた体育授業として設定し，「自立を促す」「支援を工夫する」「スポーツの魅力伝える」の視点から体育授業の構想・学習指導計画の作成等に取り組ませた。

3) 開発 (Develop)

障がいのある生徒でもスポーツの魅力にふれ，

卒業後も生涯スポーツとして取り組む契機になることを意図して、生徒の実態等を考慮に入れながら既存の障がい者スポーツの教材化を行った。本授業では「ジャベリックスロー」「フライングディスク」「ボッチャ」を基に、ルールや用具を工夫した教材開発に取り組ませた。

4) 実施 (Implementaion)

体育授業は、表1の4時間単元で実施した。大学院生がチーム・ティーチングで授業の進行や指導を行い、附属特別支援学校の先生に適宜、サポートして頂いた。4回目は、「とくしんピック2018」として、「する、みる、ささえる」の役割を生徒が順に体験するスポーツ大会が開催された。

表1. 体育授業の内容 (4時間)

	授業日	内容
1回目	11月19日	導入・出場競技紹介
2回目	12月3日	応援練習、種目練習
3回目	12月13日	大会リハーサル
4回目	12月18日	とくしんピック2018

5) 評価 (Evaluation)

授業づくりを進めていく段階で、カンファレンスを必要に応じて行い、実践と評価を往還させながら授業改善を図っていった。カンファレンスには、附属特別支援学校の教諭にも参加して頂き、相互に意見交換しながら授業づくりを進めていった。最終の成果報告会では、上記の取り組みを整理し、発表させた。

3. 地域社会を核とした教育と研究のつながり

本授業は、附属特別支援学校と連携しながら大学院生の実践的指導力の向上と附属特別支援学校の体育授業の充実を意図した取り組みである。本取り組みには次のような特徴がある。

1) 附属特別支援学校の研究テーマとの連動

特別支援学校の研究テーマや育てたい生徒像、生徒の実態等を調べさせ、それを基にした授業づくりに取り組ませている。附属学校の研究テーマと連動させることにより、附属とのWin-Winの関係が保たれている。

2) 附属特別支援学校での研究会の開催

大学教員、大学院生、附属教諭が月1回程度の定期的な研究会を開催して、情報交換を図っている。また、体育授業が実施された際には、授業改善のためのカンファレンスをその都度行っている。運動指導に関する専門性と特別支援教育に関する専門性を相互に補完しながら、よりよい授業の実現にむけた協力体制のもとで進められており、この取り組みは10年間継続して行われている。

3) 附属特別支援学校への研究成果の還元

高度化演習では、第14-15回目に全体での成果報告会が実施される。それに加えて、附属特別支援学校での成果報告会を別途実施している。高度化演習の実践を教育現場に還元する機会をつくるとともに、大学院生の取り組みを附属特別支援学校の授業改善に活用してもらっている。

4. 本授業の成果と課題

この授業の最大の特徴は、学校現場でリアルティのある学びができることである。特に、共生社会の実現が目指されているなか、生徒の実態に寄り添いながら障がいのある生徒にも、よりよい体育授業を実現しようとする取り組みは、「シンプルだけど奥深い」授業づくりを体験し、実践的指導力の向上に効果的と言える。

表2は、大学院生のコメントの一部である。

本授業の経験は、今後の(将来の)教員生活の礎になるものと言える。一つ一つの授業の積み重ねがよりよい教員の養成につながっていく。今後も附属との連携を核にして教育や研究を推進していきたい。

表2. 学生のコメント

- ・ 特別支援学校での体育授業をみることも、することも経験がなかったので、実際に経験できて今後に役立つものになりました。この経験は通常学級の指導でも活かせると思うのでよかったです。
- ・ ADDIEシステムにそって段階的に進められてよかったです。特に、振り返ってみると、分析と開発のところが重要だったと思います。
- ・ 特別支援学校の先生方とカンファレンスをする事により、自分たちだけでは気づかない点を指摘してくれたので、大変勉強になりました。